彗星だより

今年も年初から彗星界は賑はしい。去る一月二十日コペンハーゲンから來電があつて、南亞の Blathwayt なる人が一彗星を發見した由を報じて來た。始め、**おとめ**座の西南にあつたが、日を經るに從つて速度を增し、數日の中に**セキスタント**座や**しゝ**座を通過して、二月の初めには既に**かに**座まで來て了つてゐた。京都では二月の最初の一週間目までは天氣都合が惡かつたり、月にさまたげられたりして、餘り多くの觀測は出來なかつたが、二月七日に東京から神田氏の計算された軌道要素が知らされるに及んで位置豫報が確實になり、にはかに 18 センチや、33 センチの望遠鏡が活動を始めた。神田氏の軌道では（**プレテン**第 64 號を見よ）近日點通過が一月の初めとなつてゐるから、今後は遠ざかり光りも弱くなる一方であるだらうが、傾斜角が百三十度に近く、當分は丁度地球の裏側にまはつてゐるから二三ヶ月は少なくとも容易に觀測されるだらう。京都の中村氏は「五センチでも見える」と言つてゐられるけれど、普通の眼力でならば、やはり 10 センチ以下の望遠鏡では、（見えるには見えても）觀測は不能である。

そのうちにタトル彗星は發見されるだらう——どこかで。

昨年發見されたヴンビースブルク彗星が相變らず好く見えてゐる。やはり大體は太陽から反對の天空にあつて、今は**しゝ**座を逆行してゐる。速度は餘り大きくない。今でも可なりの尾を見せてゐる。特に反射鏡による寫眞が見事である。——此の星は、初めから、見えてゐる位置の都合上、軌道の計算が困難で、歐米でも多くの熟練家を苦しめてゐるが、二月の始めの頃、バークレー大學のマクスエル氏の軌道による豫報から餘り大きく離れてゐない事實から見ると、流石にロイシナー教授一派の人々の手腕には感心させられる。最近グリニチのクロンメリン老が發表された軌道の要素は

近　日　點＝1925 年 10 月 2.7797 日（U.T.）

近日點引數＝	106°	3′	8.1″	(1925.0)
昇　交　點＝	334	35	51.8	
傾　　斜＝	49	10	14.6	
近日點距離＝	1.560508			

になつてゐる。

エンソア彗星は未だ見えない。しかし、豫報の如くんば、光度もよほど大きいから二月末から三月の東天を賑はすだらう。位置は**プレテン**を見られよ。

昨年は十二個も彗星が見えたけれど、皆何れも光度が肉眼以下で、アマチユア達を失望させること甚だしい。せめて一つや二つぐらゐは四等や五等級の光りに上つて呉れいと言ひたくなるが、そう無理ばかり通らないものか？

近頃、ちよつと面白い話しを聞いた——否實は讀んだのだ。昨年の十一月の中頃、米國ヤーキース天文臺でヴンビー教授が發見した彗星は、英國へはコペンハーゲン電報が屆かない前に B. B. C. 會社の無線電話局が放送によつて傳へたのだといふ。すると、グリニチでは早速ステヴンソン氏の宅に電話をかけ、ステヴンソン氏は直ぐ翌朝果して電報の通りの**りよりけん**座に之れを見つけ出したのであるといふ。此のステヴンソン氏の發見といふことがコペンハーゲン天文臺へは、ヴンビー氏の發見よりも早く知らされたものだから、中央局の人々は、ステヴンソン氏とヴンビー氏とを共に獨立發見者として取り扱つたのであるけれど、上述の事情が分つて見れば、ステヴンソン氏は決して純粹な獨立發見者ではないのである。飛んだ間違ひで功名を擔ふことになつたステヴンソン氏は笑止千萬であらう。

何と言つても彗星は愛嬌ものである。いろんな意味に於いて愛嬌ものである。星そのものが、其の運動といひ、其の風才といひ、可なりセンセイショナルであるが、此の彗星が現はれることによつて、人間社會に又いろいろな逸話が生れるから愉快である。人を愚弄したり、興奮させたり、けがの功名を與へたり、笑はせたり、泣かせたりする。（山本）

追記——

タトル彗星がいよいよ發見された。時は去る一月十二日、發見者はベルゲドルフの例のバーデ君。やはり、あの百センチの大反射鏡で成功したのだらう。發見當時の彗星の光度が 1.55 等だと言ふから。——いや全くバーデ君の勉强ぶりと F3 の百センチの威力には恐れ入る。星は今**とかげ**座を去つて、**アンドロメ**の中を東行してゐる。近日點は四月二十八日らしい。（二月二十日）